

南方（その他）

スマトラ島の近歩五連隊勤務

山梨県 島田三郎

―島田さんは近衛兵だったと聞きましたが、外地勤務は南方でしたか、南支、馬來、シンガポール攻略をした部隊ですが。

私は体は良いが身長が足りないので、徴兵検査は丙種だった。軍隊には用が無いものかと思ひまして、太平洋戦争が始まってから結婚したのです。ところが、召集令状が飛び込んで来たので、まさに文字通り一睡の夢のような、六カ月という短い新婚生活でした。私も覚悟を決め、いよいよ祖国のために滅私奉公の

精神で、昭和十八年四月十四日、東京麻布の近衛歩兵第五連隊第五中隊に入隊しました。しかし、体の小さい私には軍服に身体を合わせて着る以外になかったのですが、一人の新兵が誕生したわけです。

毎日、毎日ラッパの生活で、上官や古參上等兵から軍人としての訓辞を受ける。私も男子として生まれた帝國軍人ですから、初めて日本男兒であると心に誓って軍務に尽くしました。

その後、私たち初年兵は千葉県の佐倉部隊に転属し、広大な習志野原で訓練、演習の日々でした。ある日、外出命令が出され、山梨の甲府へ帰り、家中の者や兄弟に来てもらい、楽しい一夜を過ごしたのです。

生家と甲府に最後の別れを告げ、佐倉部隊に帰る心は何ともやるせない気持ちでした。それは、いよいよ

戦地出發が近いとひそかに考えていたからです。

七日ぐら以後、それぞれ新しい軍服・下着が支給さ

れ、二、三日後全部の点検を受け、さあ出發です。たしか夜だったと思う。兵舎から行軍で佐倉駅、上官の命令で列車に乗り込み出發。列車の窓は全部締切りで二、三日ぐらいは外の様子が判らない。着いた所は門司港でした。

「いよいよ出港でしょうが、行先は何処だか予想がつかまりましたか。

勿論知らないのですが、船団は「松」ということでした。乗船三日目ぐらからは船酔いで食事をする者も少なくなり、船は南支那海のどこかへ向って進んでいるらしいとの噂だった。しかし、その頃はもう制空・海権は連合軍に握られ、途中潜水艦に追われ、台湾の台北港へ避難したり、島陰へひそんで、ようやく昭南港（シンガポール）へ入港、上陸することが出来ました。

昭南港出帆後、着いたのがスマトラ島のベラワン港で、上陸した私たちはどこへ行くのかわからない。車

両隊の車に分乗し、港から少し離れた広々とした地点で、中隊の兵隊に迎えられました。

中隊長から、戦地へ来てからの日本軍隊としての心構えにつき訓辞を受け、初めて野戦に來た感じが心を強く打った。迎えてくれる中隊の先輩の顔を見て私は驚いた。日焼けした真つ黒な顔に黒眼鏡だ、紫外線の強い南方地帯のため眼を守るための黒眼鏡だなど思いました。

私は指揮班に籍が決まった。さあ、それからが大変である。指揮班の内務は普通の兵隊以上に何事につけて気合を入れて務めなければならなかった。それに演習までも人様より余分に動かなければならない。それでも私は農家育ち故身体を鍛えてあったので、少しは役にたったと思いました。

「当時のスマトラの状況はどうですか、現地人との関係や、連合軍の攻勢が段々と激しくなつて來たでしょうか、その防衛準備など聞かせて下さい。

私たちがスマトラ島へ上陸してからは、敵が上陸することを想定し、上陸作戦の敵を迎え撃つ演習ばかり

をしていたのです。また、上陸用舟艇で敵兵の上陸に備える演習等で、海に入つての訓練は実戦さながらで、これが連日続いた。

場所は南方マラッカ海峡で行われることも多かつた。

「私たち部隊、近衛歩兵第五連隊はスマトラにおいて、要所の地続きを守備すること、現地人の行動等について慎重に行動をとり、人間関係はよく知っておかねばならぬ、使命を持って、行動せよ」と上官からよくいわれていました。

オランダ兵は何といつても長年スマトラ島を統治していて、現地人を手馴づけているので、スパイ行動については私たちのわからぬことばかりです。たとえば、現地人がピアノをひく、その音符によって日本軍の行動を知らせる、そんなスパイ活動があることは、初年兵としては、たゞ驚くばかりです。ピアノのスパイ行動のため、日本軍の作戦行動が事前に敵に知れたこともあつたという。また、軍隊が南方作戦上多数移動する、これがスパイされることもあつたといひます。

その後、部隊は北へ北へと進駐し、スマトラ北端でインド洋に面したコタラジャに到着した。こゝで、敵前上陸をしそうな地点を視察し、だんだん事態が緊迫していることを身をもって感じたことです。ここ北部スマトラはまだ日本軍も進出したこともない所で、私たち部隊は、目の前に見えるサバン島（海軍にとつて重要な港）へ警備のため上陸しました。

―近衛師団は本来、禁関護衛が任務だったが、第五連隊は、支那事変では南支那の作戦、大東亜戦は馬來進撃など、完全な戦闘部隊になつていたわけですが、昭和十八年五月には、五連隊は近衛第二師団となり、内地の部隊が近衛第一師団と改称されていきます。

その後、十一月には、広島島の第五師団と近衛第二師団は海洋兵团化され、特に近衛歩兵第五連隊は海上機動編成になつている筈ですが、部隊の様子は二分変わったのですか。

私たち初年兵はよく判らなかつたのですが、現地の初年兵教育では、戦地で役立つ「戦える兵士」とし

て練成するのだと、教官に言われておりました。

また、後に聞いた中隊長の話によれば、人員も旅団規模の四千人近い部隊に編制改正になった。今までのような、単に防衛の任務だけではなく、海上機動反撃部隊、いわゆる逆上陸部隊という積極的任務に代ったということでした。

逆上陸部隊とは、

「敵が既の上陸し、橋頭堡を確保して、我が防衛軍と交戦中の真つ只中の背後に、夜間を利用し、軍艦その他上陸用舟艇をもつて、海上機動し、強行突入、敵の後方を壊滅・撃滅するもので、全連隊あげて総特攻という部隊である。従つて、將兵は夜間攻撃に熟練し、小部隊で進撃・奇襲・白兵戦に長ずるものでなければならぬ。」

近歩第五連隊は精銳なため決死部隊として選ばれたわけです。それが、先に申した、マラッカ海峡での連日の猛訓練ということで、その時は無我夢中で、歯を喰いしばっていたが、後で、ようやく訓練の意味が判った次第です。

―サバン島は対英・印の第一線重要拠点だということですが、進駐後の状況を。

サバンは海軍の重要港で、我々の作業は、島へ上陸してくる敵を防ぐ防空壕掘である。だが山の中腹でも全部岩石だから大変な作業で、その壕に入って上陸して来る敵兵を撃つのが、日本軍にとってはその場所が死に場となる場合もあります。

壕を掘るにも鉄ハンマーと石が自分の持ち物だった。それに銃と飯盒である。上官が作業の手順を説明するがなかなかほかどらない。毎日の暑さと蚊のため思うように作業は出来ず、私も遂に、サバン上陸三十二日目で発熱してしまいました。

衛生兵に「マラリヤだ」と言われ医務室に入室した。熱が四十二度にもなる。頭が朦朧となる。高熱とあるえが交互に襲う。それで、特効薬のキニーネを飲むのだが水がない。頭を冷やす水も少ない。しかし、十日程で中隊に戻ることが出来た。何としても病気をしては駄目であると痛感しました。

サバン島は、敵の東洋艦隊の基地であった。そのた

め毎日、夜明け頃にグラマン戦闘機が飛来して、低空飛行で日本軍の兵舎に機銃掃射してくる。私たちもサバンの戦況の悪いことを感じていたが、陸・海共同で死守する任務がある。兵隊もマラリヤの発熱、食糧事情も悪い中、必死であった。岩山だけで平地も少ない島だから、木の芽の塩茹でで飢えをしのぐが、煙を出せば、グラマン機に爆撃される。炊事係も命がけでした。

その悪条件の中、炎熱下での飛行場陣地は珊瑚礁のため鉄の火花を散らし、最後の拠点となる複郭陣地はジャングルの中で、サウナ風呂以上の蒸し暑さ。毒蛇・サンリ・山蛭、すべて毒のある動植物の中、雨水以外水も無い生活で、ここが最後の決戦場となる覚悟での陣地構築作業でありました。

― サバン空襲の話が出ましたが、戦争記録によると、
「四月一日、スマトラのサバン付近に敵機動部隊来襲、第九飛行師団長は神翔特別攻撃隊を投入」とあります。

私たちに、戦後中隊長が話されたのは、

「英・仏・蘭・濠の連合機動隊が来襲して来た。敵の目標はサバン島の港湾施設で、敵戦艦の主砲が喰りを生じて我々の頭上を飛んで破裂する物凄い戦闘が三時間続いた。我々近歩第五連隊第一大隊はそれにこらえた」

とのことで、その後サバン島からスマトラ島に復帰したのは、六月に沖繩が玉砕したため、本土決戦態勢に入ったからだそうです。

― 終戦は何処で何時頃知りましたか、戦後の状況を。
八月十七日、中隊全員に非常召集があつて、兵舎の前に整列すると中隊長から、

「八月十五日無条件降伏の詔勅がおりた。」

と話され、隊員皆茫然として、水を頭からかけられたように一同黙々として、ただ涙が流れるのみだった。

頭の中は「召集令状を受け、新兵としての訓練、遙か南方戦線まで駆け巡って無条件降伏とは情けない。」

そんな気持ちで、涙もとめどなく流れて、息のつまり思いでありました。語る中隊長も、聞く兵隊も共に日本軍人である。どんなことがあつてもうるたえてはな

らない。「さあ、これから自分たちはどうしたら生きていくことが出来るか。軍隊でなく、日本人として協同して生活が出来るようお互いが務めなければならぬ。」

幸い、現地の人も、以前と変わることなく、「シイサンⅡ先生」と私たちを呼んでいた。中隊長は

「終戦といえども内地に帰るまでは兵營の生活であるので、軍隊としての規律を守りながらの日常生活するよう」

との話で、私たちはそれを実践して、自活、連合軍の労役にも侮辱にも耐えて来ました。

終戦後の労働作業が終わったある日、週番下士官から「島田、俺の部屋に來い」と言うので、下士官室にいくと家から手紙が来ていると言って妻からの便りを渡された。その場で開封して見ると、内容は「男児を出産したが、出産後三カ月で死亡した」とのことであった。農業で多忙をきわめ、女手一つで農事やらあれこれと励んでいるので、さぞ大変なことであつたらうと思つて、私は妻に済まないことだと感謝した。医者

にもかからず、薬など思うように手に入らぬことだし、総ての品物は配給のよし、内地でも窮乏生活をして大変だなど文面から察して思い偲びました。

上官も手紙を見て「内地の人も大変苦勞しているだろうな。島田も子供を無くして気の毒である」と慰めて戴いた。私と同じように男親のいない留守の家庭もあると思うと、戦争は二度としてはならないとつくづく思いました。

シンガポールで最後の使役を終え、復員船が入港した。今後は敵艦もない静かな印度洋から太平洋を経て、一路内地に向かつて航行した。

六日ぐらいい後、「九州が見えるぞ」とのこと、皆甲板に出て見る、遙かに内地が、九州であろう。私は心の中に故郷甲府と我が家を連想して喜びに湧いた。

内地復員は昭和二十一年十月二十八日、大竹港であり、私は故郷甲府に向かった。私の生家、母国の故郷へ帰ることで大東亞戦争が終わりを告げた。